



▼感謝状を贈呈された（写真左から）福田さん、久米さん、崎山さん



長年の食育活動に感謝状

甲佐町食生活改善推進員

5月27日（金）人吉市で、平成23年度熊本県食生活改善推進員連絡協議会総会が開催され、甲佐町食生活改善推進員3人が25年以上の推進活動が評価されて、感謝状を贈呈されました。贈呈されたのは、久米久恵さん（船津区）、崎山良好さん（下田口区）、福田慶子さん（仁田子区）。

食生活改善推進員とは、食を通じた地域の健康づくり活動を推進しているボランティアのことで、本町では、甲佐町食生活改善推進員協議会（宮本あけみ会長31人）が活動。「ヘルスメイト」の愛称で食育活動に取り組み、料理研修会や親子の料理教室の開催、町で実施する10か月児教室での手作りおやつ紹介などで、食の大切さを啓発しています。表彰を受けて3人は「家族や推進員の先輩方に支えられたお陰で活動を続けられたと思います。若い人たちは仕事と家庭とで大変だと思います。しかし、『食は命の源』ですから、若い人こそ食の大切さを理解して、家庭や地域に広げてほしいです」と話しました。

アユ釣り愛好者が緑川に

6月1日（水）アユ漁解禁日

6月1日（水）県内河川でアユ漁が解禁となり、緑川には早朝から多くのアユ釣り愛好者が訪れて、川に浸かってアユ釣り用の独特の長竿を静かにあおりました。

アユ釣りのポイントとして知られる、緑町の中甲橋付近には、約30人ほどの釣り人とアユ釣りの釣果を見に来た愛好者が集まり、解禁となった友釣りを楽しみました。

今年の解禁日は、水量が少なく水温も低かったため、釣果は少なめ。甲佐の風物詩である緑川のアユ釣り風景は、秋まで楽しめます。



▲多くのアユ釣り愛好家が釣り糸を垂れた中甲橋周辺



▲熊本市の上通で開催された第4回観光物産展

甲佐の観光・物産をPR

第4回甲佐町観光物産展

5月26日（木）熊本市の上通「びぶれす広場」で、第4回甲佐町観光物産展が開催されました。本町の観光資源と物産、特産品などを広くPRすることを目的に、甲佐町商工会（中村幸男会長）が主催、甲佐町観光協会、J.Aかみましが協賛。同展は、平成20年度から毎年開催されています。物産販売コーナーでは、アユの塩焼きやちみつき、あられ、生マシユマロ、ニラのメンチカツなどの商品が並ぶとともに、やな場や麻生原のキンモクセイなどの観光案内や、町を中心に取り組んでいる特産品開発商品での試食と販売コーナーなども設置。繁華街を通る人々は足を止めて、展示品などを眺めて購入するなど大変な賑わいを見せました。

青少年の心をはぐくむ

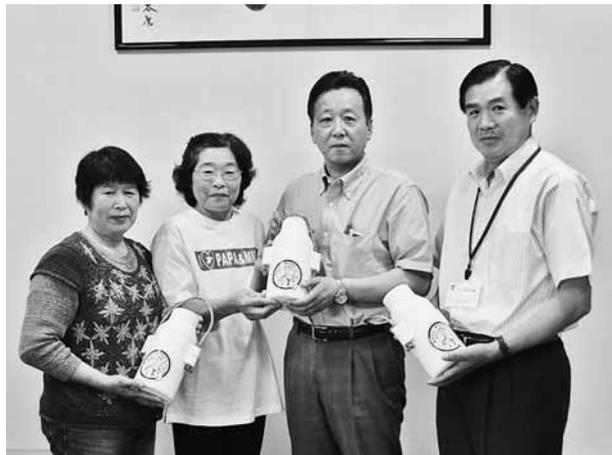
甲佐町青少年健全育成町民会議

6月18日（土）町生涯学習センターで、甲佐町青少年健全育成町民会議（奥名克美会長）の平成23年度総会と、同会議主催で、青少年健全育成に関する講演会が開催されました。

講演会は、「青少年の社会的自立を目指して」と題して、勇志国際高（通信制・天草市御所浦町）の校長を務める野田将晴さんを講師に迎えて開催。町内外から約70人が参加。警察官や青年海外協力隊などでの経験を踏まえて、野田さんの教師として現代の青少年と関わる活動について講演がありました。



▲青少年との関わり方について講演する野田さん



▲奥名町長に手渡す池上さん（左）と田上さん

お父さんに牛乳をどうぞ

「父の日に牛乳を贈ろう」キャンペーン

6月15日（水）町内の酪農家女性部2人が「父の日に牛乳（ちち）を贈ろう」キャンペーンで、町役場を表敬訪問しました。

同キャンペーンは、母の日にカーネーションを贈るのに対して、父の日に贈る定番のプレゼントがないことから、父と牛乳（ちち）をかけて感謝の気持ちを添えて贈るために企画。牛乳の消費拡大運動の一環として取り組まれ、平成13年からキャンペーンを展開しています。

女性部を代表して奥名克美町長と師富省三副町長を訪れた、田上禎子さん（浅井区）と池上啓子さん（大町区）は、「牛乳をたくさん飲んで健康になって、今後も公務をがんばってください」と父の日用の特製容器に入れた牛乳を手渡しました。

障がい者も共生できる施設を

「みどりの家」開所1周年記念式典



▲昨年6月に、就労継続支援B型事業所「上益城きぼうの家」（山都町）の分所という形で開所した精神障害者自立支援作業所「みどりの家」

6月1日（水）横田の精神障害者自立支援作業所「みどりの家」で、同作業所の開所1周年記念式典が開催されました。

同作業所（後藤一子所長）は、障がい者が集うことができ就労できる施設を設置しようという目的で、町内の障がい者支援ボランティアグループの「あいの会」（三芳智代代表）が、約9年前から施設設置を検討。昨年6月1日（火）に、就労継続支援B型事業所「上益城きぼうの家」（緒方省吾理事長・山都町）の分所という形で開所し、同会が運営しています。

現在は、町内外から11人が通所して、果物を包む緩衝材「フルーツキャップ」などを製作している。

式典には、通所者やスタッフ、県・町などの行政機関、福祉関係者など約50人が出席。講演会や交流会も併せて開催されました。

後藤所長が「住み慣れた地域で障がい者も共生できる場を作りたいと願って、皆様のご協力をいただき、この作業所が生まれました。就労するための技術を身に付ける施設としてこれからも活動していきたい」とあいさつしました。